台大日本語文研究第 42 期
2021 年 12 月，頁 1-22
2021-09-22 收稿，2021-11-23 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.202112_(42).0001

《宇津保物語》中的俊蔭女兒人物造型
—「天人」格、「国母」格的理想女性形像—

賴振南*

摘要

讀者應該可以想像得到《宇津保物語》作者在創作物語故事和型塑許多主要人物的過程中，有意透過描繪秘琴傳承人藤原仲忠這一位具備生動活躍人物特質的理想男性形象，來達成日本歷史上第一部長篇物語的主要意義和統一性。另一方面，在仲忠的人物造型和他的活躍事蹟描寫所支撐的物語暗地裡，也不能忘記俊蔭女兒=仲忠母親在物語中所發揮的重要角色功能。

貴宮被多達十六名男性貴族視為理想女性不斷地求婚，雖然她拒絕了追求者，最終以政略結婚的形式入宮，成為皇太子妃，後來位居「國家父母」的皇后，但她始終嚮往以仲忠為主的秘琴一族生活樣貌，僅剩抱怨宮廷生活的局促和不方便的描述，而其身影逐漸地從故事的正面舞台銷聲匿跡。相比之下，從第一卷就已出現的俊蔭女兒，雖是潛伏存在於物語暗地裡的人物，但如果將她在全篇物語中，具備被比擬作輝夜姬的天人性、容姿美、富母子間的慈愛、藤原兼雅的最愛妻子、心胸寬厚能接納兼雅的眾小妾、秘琴一族的指導者以及她後來榮獲堪稱「國母」格地位的「尚侍」女官職等等的描述，一併考慮進來，便可以看出她的理想女性形象，在整部物語中確實發揮了重要的角色扮演。更可以說她在整部物語的故事情節中，其人物造型被型塑成一位，在任何境遇下皆會開花，在隱蔽處境中都能閃耀發光的人物。

關鍵詞：俊蔭女兒、輝夜姬、人物造型、國母、天人

* 天主教輔仁大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

Ideal Female Image of the Daughter of Kiyowara no Toshikage in Utsubo Monogatari: From Deva to Mother of the Empire

Chen-nan Lai*

Abstract

In Utsubo Monogatari (Tale of the Hollow Tree), the author, in advancing the narrative and characterization, uses the ideal male image and the many abilities of Fujiwara no Nakataka, who is the heir to the magical kotos (harps), to elaborate and expand intricately intertwined sub-plots into Japan's first full-length monogatari, or fictional prose narrative. Underneath the characterization of Nakataka and vivid portrayals of his encounters, however, the female role and image of the daughter of Kiyowara no Toshikage, who is Nakataka's mother, cannot be overlooked.

The beautiful Atemiya, daughter of lord Minamoto no Masayori, is viewed as the ideal woman; she has attracted 16 competing suitors from noble families, who all try to win her hand through extravagant courtship. In the end Atemiya refuses them all and strategically marries the Crown Prince. She enters the Palace, eventually becomes empress, and is regarded as the "mother of the empire." Despite her stature, Atemiya continues to long for a lifestyle centered on Nakataka and the magical kotos. She starts to complain about life in the Palace, which she feels is filled with restrictions and inconveniences, until she gradually disappears from the narrative. By comparison, the image of the daughter of Kiyowara no Toshikage is in stark contrast with that of Atemiya. Toshikage's daughter, who happens to be Nakataka's mother, plays a secondary role

* Professor of Japanese Department, Wenzao Ursuline University of Languages

臺灣人文學術期刊資料庫

in the narrative and remains in the background despite first appearing in Chapter 1. She is the wife of Fujiwara no Kanemasa and the love of his life. In a sense, she is comparable to the female protagonist Kaguya Hime in Taketori Monogatari (The Tale of the Bamboo Cutter), who is a celestial being with god-like characteristics. Toshikage's daughter has extra-ordinary beauty, shows motherly affection, and has a generous heart as she is accepting of Kanemasa's concubines. She also teaches the secret of the magical kotos to her son Nakataka and her granddaughter Inumiya. She is eventually appointed naishi no kami, the highest government post for a court lady. The above contributes to her ideal female image, and she does play an important role in the narrative as one who flourishes despite harsh circumstances.

Key words: daughter of Kiyowara no Toshikage, Kaguya Hime, characterization, mother of the empire, deva

臺灣大學學術期刊資料庫

『うつほ物語』における俊蔭の娘の人物造型
―「天人」格、「国母」格の理想的な女性像―

頼振南*

要旨

『うつほ物語』の作者は、多くの主要登場人物の造型と物語を創り上げる流れの中で、秘琴伝承者の藤原仲忠を、生き生きとした人物特質を持つ理想的な男性像として描くことにより、日本史上初の長編物語の主な意義と統一性を求めたと考えられよう。一方、仲忠の人物造型とその活躍ぶりが物語を支えている陰に、俊蔭の娘=仲忠の母の占める重要な役割があることも忘れてはならない。

十六名にも及ぶ多くの男性貴族に理想的な女性として求婚されたあて宮は、十数人の求愛を拒んで政略結婚の形で入内し、皇太子妃、のち皇后という「国の親」になったが、仲忠が中心とした秘琴一族の生活ぶりに憧れ、宮廷生活の窮屈さと不自由に対する愚痴を漏らしながら、次第に物語の表舞台から姿を消していく。これに対して、首巻から登場した俊蔭の娘は、物語において陰の存在であるが、かぐや姫にも擬えられる天人性、美質、母子間の慈愛、藤原兼雅の最愛の妻、兼雅の妻妾を受け入れる心の寛大さ、秘琴一族の指導者や最後に得た「尚侍」の「国母」格の地位などを考え合わせてみれば、実に物語全般にわたり重要な役割を果たしている理想的な女性像であり、置かれた場所でひっそり花をつけるような、隠れた場所で輝く「光」のような人物造型となっていると考えられるのである。

キーワード：俊蔭の娘、かぐや姫、人物造型、国母、天人

* 輔仁大学日本語文学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

『うつほ物語』における俊蔭の娘の人物造型
―「天人」格、「国母」格の理想的な女性像―

頼振南

一、はじめに

『うつほ物語』[1]の冒頭巻「俊蔭」は、主人公俊蔭の秘琴獲得に端を発する。俊蔭は遣唐使として唐土へ航行していく途中、激しい風に遭って船が難破し、波斯国の海辺に漂着した。その後、二十三年の歳月を費やし、命を賭した冒険と、神仏の加護、仙人と天人の加持により、三十面の秘琴と秘曲を獲得して貿易船に乗って波斯国から三十九歳で帰国した。俊蔭は日本に辿り着くまで、途中で一部の無名の秘琴を関係者に贈ったので、ようやく日本へ帰ってきた時、手元に残っていたのは名のある十二の琴のみであった。興味深いのは、漂流中に三十面の秘琴を抱えている俊蔭が、天女の教示で七人の山の主と八人で、七日七夜弾奏した響きが仏の国まで到達したために、文殊が事情を確かめにやってくる場面である。「文珠帰りて仏に申したまふときに、仏、文珠を引き連れて、雲の輿に乗りて渡」（「俊蔭」p.35）ってくると、俊蔭は仏と文殊に白木の琴を献上する。しかし、なぜか天人が名付けた「また人に聞かすな」（「俊蔭」p.31）の秘琴「なん風」と「はし風」は、仏と文殊に献上していない。このことから、作者がすでに「なん風」と「はし風」を中心とする物語の未来図を構想していたほか、名のある十二面の琴の行方に、読者に関心を向けさせようと意図していたことがわかる。

『うつほ物語』は、俊蔭個人流離譚を以って物語を書き出したが、物語の最終巻の「楼の上」二巻で、俊蔭―俊蔭の娘―仲忠―犬宮と

---

[1] テキスト：中野幸一　校注・訳『うつほ物語①』（1999）、『うつほ物語②』（2001）、『うつほ物語③』（2002）、新編日本古典文学全集 14～16、小学館
以下の引用は、「巻名」ページ数（例：「俊蔭」p.31）で表記する。用例検索は、データベース「新編 日本古典文学全集」
（知識探索サイト　ジャパンナレッジ　プラス　JapanKnowledge+）
http://www.jkn21.com/koten/displaymain　に拠る。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

四代にわたって伝えられた秘琴伝授の物語の大団円として琴の一族の繁栄を語り、首巻の「俊蔭」と首尾照応して日本史上初の長編物語の誕生となる。それでは、『うつほ物語』二十巻全体の構想をどうとらえるか、便宜上、室伏信助氏の以下の解説を借りて示しておくとする。

第一部　俊蔭～沖つ白波
第二部　蔵開（上）～国譲（下）
第三部　楼の上（上）、楼の上（下）

第一部は、音楽伝承譚と求婚譚とがまじりあって複雑に展開しますが、前者はその一部が実現したにすぎないのに、後者が大きく張り出して、その構想を完結します。第二部は、求婚譚の枠から開放されて音楽伝承譚が復活し、さらに激動する政治的社会のなかに、超然とした主人公仲忠一族の理想的な生活が描かれます。第三部は、音楽伝承譚が完成する内容をくわしく描き、第一部の始まりとひびきあって、ここに琴の芸術の不滅を強調する華麗な琴の霊験譚の幕を閉じます。[2]

室伏氏の解説から分かるように、『うつほ物語』は河川に例えて言えば、主流の音楽伝承譚が求婚譚の支流やほかの傍流などに伴われて雄大な大河物語を形成してゆくのである。さらに津島佑子氏の、

第一巻で死んでしまう俊蔭が、ずいぶんあとになっても、あちこちで霊力を発揮していることが、気になりはじめた。物語のはじめですぐにしんでしまうのに、物語全体の主人公はだれかといえば、この俊蔭にちがいないのだ。俊蔭が天からさずかった琴をめぐって、娘から孫、孫からひ孫にいたるまでつづく音楽一家の運命をえがいているこの物語では、したがってつねに、登場人物たちが俊蔭に見はられているような気配がある。[3]

と、述べた言葉を踏まえ、ふたたび『うつほ物語』を俯瞰して考え

[2] 室伏信助（1992）「『うつほ物語』解説」日刈あがた・津島佑子著『堤中納言物語・うつほ物語』少年少女古典文学館 7、p.325-326 講談社
[3] 津島佑子（1992）「『うつほ物語』あとがき」日刈あがた・津島佑子著『堤中納言物語・うつほ物語』少年少女古典文学館 7、p.321 講談社

臺灣大學圖書館

てみれば、作中の大事なところで、天女に作ってもらった秘琴が引き起こした奇瑞を見せ付けられる背景には、首巻の途中から不在になった俊蔭の霊力がいつも介在しているようである。その霊力が秘琴弾琴を媒介にして娘と孫仲忠に分け持たせて物語全体の実在の男・女主人公として音楽伝承譚が完成するわけである。

『うつほ物語』二十巻にわたり全編の文字数は約六十三万文字[4]で、物語のすべての登場人物は、主要登場人物が七十九人 、脇役・端役が二百七十七人掲載されている。『うつほ物語』の作者は、多くの主要登場人物の造型と物語を創り上げる流れの中で、仲忠を生き生きとした八面玲瓏な人物特質[5]を持つ理想的な男性像として描くことにより、日本史上初の長編物語の主な意義と統一性を求めたと考えられよう。要するに、作者は、秘琴物語という主題を構造化するため、一族の命脈を繋げる藤原仲忠を創り上げ、秘琴を媒介道具とし、更に「孝」の精神を内的構造として、流離の艱難辛苦を味わわせ、求婚の危機を乗り越えさせると共に学才を発揮させ、交友関係をも拡大していく。このように物語は連続的、漸進的に昇華されていき、ついに円満な結末へと至るのである。一方、仲忠の八面玲瓏な活躍ぶりが物語を支えている陰に、俊蔭の娘=仲忠の母の占める重要な役割も忘れてはならない。『うつほ物語』における理想的な男性像である仲忠の延長線上に描かれた、理想的な女性像としての俊蔭の娘を、「天人」格、「国母」格の人物造型として探求してみたい。

二、母子間の慈愛、秘琴一族の指導者、容姿美

物語の冒頭や首巻に主人公を登場させるために、ストーリーの長

4 室城秀之　校注（1995）『うつほ物語　全』おうふう

5 拙稿（2020）「『うつほ物語』における理想的な男性像―八面玲瓏な仲忠の人物造型―」『台大日本語文研究 NTU Studies in Japanese Language and Literature』第 39 期、pp.1-25
仲忠の八面玲瓏な男性理想像としての特質:「『光』る主人公」、「親孝行の子」、「あて宮の最愛の相手」、「『好き者』の行動者と実践者」、「大家族を維持、強固する人物」、「俊蔭伝来の書籍の学問者」、「秘琴系譜の伝承者」、「友情の知音者」。

臺灣大學學術期刊典藏

短問わず、必ずその生い立ちを物語るのは、物語の決まりのようである。『うつほ物語』の首巻「俊蔭」もそれに則って「琴の一族の始祖」[6]の俊蔭の秘琴獲得譚から語り出している。俊蔭の娘が誕生したが、父俊蔭は自分の考えや態度などをかたく守って、「娘は天道にまかせたてまつる」(「俊蔭」p.45)と、現実的に生計を立ててゆく道を遺さない。父の死後、頼りとするものがなく一人残された俊蔭の娘は、貧乏のどん底に落ちていく最中、太政大臣の若小君(藤原兼雅)と一夜の契りを結んで子をもうけた。その後、さらに不運・不遇に遭遇しつつ、幼い子(藤原仲忠)を抱えて完全に行き詰まった生活を過ごしている。幸いに五歳の時の仲忠は、早熟な子で母のために手を尽くして食料を探し求め、ある時、山に入って熊に親思いの孝行を感心され、大木の空洞(うつほ)を譲り受け、母子はやっとそこに移って二人寄り添って暮らしている。そこで、俊蔭の娘は、父俊蔭に習いとった秘琴の技を子供の仲忠に伝授し始めた。「俊蔭」巻は俊蔭の漂流譚から始まって俊蔭の娘の流離譚に変わり、さらに母子を襲う艱難辛苦の生活の中で、仲忠の母俊蔭の娘に対する、『二十四孝』にも準じるような孝行譚へと展開していく。とりわけ、母子間の絆形成には俊蔭の娘の慈愛と仲忠の孝行精神が欠かせない要素になっているほか、俊蔭の娘は一族の秘琴伝授をつなぐ命綱的役割として終幕まで、物語の底流に影響を与え続ける。最後に、「楼の上、下」巻の八月十五夜の日に、俊蔭の娘は、嵯峨院と朱雀院をはじめとした多くの人々の見守る中、秘琴伝授者として孫犬宮とともに姿を現し、弾琴を共演するだけではなく、「また人に聞かすな」の霊琴「はし風」を演奏して空を響かし、地を揺るがす。その場面描写はあたかも天女かぐや姫が月世界へ帰還する場面にも匹敵する見事さで、物語のクライマックスとなっている。

また、俊蔭の娘の容姿美は、気だてが「らうらうしき」(「俊蔭」p.45)ことも世間で評判が高くなって、本来ならば、俊蔭の娘を巡

6 (天人の予言)「天の掟ありて、天の下に琴弾きて族立つべき人になむありける。」(「俊蔭」p.30)

臺灣大學學術期刊資料庫

って多くの求婚者が殺到する展開が続くはずであるが、父俊蔭は、「娘は天道にまかせたてまつる。天の掟あらば、国母、女御ともなれ。掟なくば、山賤、民の子ともなれ。われ乏しく貧しき身なり。いかでか高き交らひはせさせむ」(「俊蔭」p.45)と言って、身分の高い方々の結婚申し込み、帝や東宮の入内要請があっても、家の門をすべて固く閉ざして、一切相手にしない。俊蔭の娘は表舞台に出ることなく、天道に任されたままで、隠れた場所、置かれた場所でその美質を維持して行く。物語の要素である求婚譚のスポットライトを浴びる栄光は、後のあて宮に譲られた形になっているのである。

十二歳の時、裳着の成女式が行なわれたあて宮は、「かたち清らに、御心らうらうじく、今めきたる御心にあり、ものの心も思し知りたれば」(「藤原の君」p.136)と紹介され、すぐに貴族社会の中で求婚の旋風を引き起こし、多くの貴公子たちから恋い慕われる。女性の生い立ちの美質は「かたち清らに、御心らうらうじく」と形容されるのは最大級の賛辞ではあるが、至高ではない。俊蔭の娘の「十二、三になる年、容貌さらにいふ限りなし。あたり光り輝きて、見る人まばゆきまで見ゆ」(「俊蔭」p.44-45)ほどの美的造型は、『竹取物語』[7]における光るように美しいかぐや姫の「イメージが重ねられていた」[8]、「この流れは『竹取物語』との類似が見られる」[9]などと指摘されている。この「光る」容姿美こそ天女のような至高美である。『うつほ物語』作中で登場人物に「光る」ように表現されている例は、藤原仲忠の 8 例、俊蔭の娘の 2 例、犬宮の 2 例、女一の宮 2 例、藤原兼雅の 1 例、あて宮の 1 例、忠こその 1 例、全部で 17 例を検出できる

---

7 テキスト:片桐洋一　ほか校注・訳(1994)『竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』新編日本古典文学全集 12、小学館
以下の引用は、『竹』ページ数(例:『竹』p.60)で表記する。用例検索は、データベース「新編　日本古典文学全集」
(知識探索サイト　ジャパンナレッジ　プラス　JapanKnowledge+)
http://www.jkn21.com/koten/displaymain　に拠る

8 須見明代(1973)「『宇津保物語』における俊蔭女」『東京女子大学日本文学』39 号、p.27 下

9 猪川 優子(1999)「『うつほ物語』における俊蔭女の美―「横の繋がり」との関わりを中心に―」広島平安文学研究会『古代中世国文学』13 号、p.14

臺灣大學圖書館期刊資料庫

が、仲忠が中心とする一族に集中しているほか、首巻の「俊蔭」は8例を占めている。あて宮の1例「なほ見れば、あるよりもいみじくめでたく、あたり光り輝くやうなる中に、天女下りたるやうなる人あり」(「嵯峨の院」p.358)と表現されているが、あくまでも求婚者の一人である仲頼が垣間見る誇張表現に過ぎない。つまり、恋する者の目には、相手のあばたもえくぼのように見えるわけである。作者はあて宮の「光る」美質を直接的に描く代わりに、多くの求婚者の一人の目を通じて間接的に表現することに止めたのである。「内侍のかみ」巻で、仲忠は母俊蔭の娘が洗髪している場面において、

> 姿のうつくしげなること、さらにいとめでたし。丈立ちよきほどに、姿の清らなること、さらに並びなし。顔かたちさらにもいはず、仲忠これを見るままに、藤壺を思ひ出でて、この北の方をさらに親と思ひ忘れて、いづくなりし天女ぞ、と思ひ居たり。(「内侍のかみ」p.237-238)

と、見惚れていることからのほか、同じ「内侍のかみ」巻で俊蔭の娘が秘琴弾琴の褒美として朱雀帝に尚侍(ないしのかみ)と任命され、また十五夜の再会を約束するときに、

> 尚侍、「それは、かくや姫こそ候ふべかなれ」。上、「ここには、玉の枝贈りて候はむかし」。尚侍、「子安貝は、近く候はむかし」。(「内侍のかみ」p.269)

と、二人が交わした言葉からも分かるように、物語中で『竹取物語』のかぐや姫のイメージと重ねて、外見を彷彿させている女性は、やはり俊蔭の娘であると思われる。

俊蔭の娘は父俊蔭の遺言に導かれて運命と戦って、「内侍のかみ」巻でやっと予言が「天の掟あらば、国母、女御ともなれ」と実現され、朱雀帝に「今は国母聞こえてましかし」、「私の后に思はむかし」(「内侍のかみ」p.268)と厚遇され、これ以上ない幸福な運命をもたらす。まさに高橋亨が『物語文芸の表現史』において次のように指摘する通りである。

「内侍のかみ」というただ人の女としては最高の官位、帝の事実

臺灣人學學術期刊資料庫

上の妻でありながらも、なおかつ皇妃ではないという特殊な位相が俊蔭の女に与えられた。「内侍のかみ」はここでは最も象徴的に理会される必要がある。皇妃に匹敵するという栄誉を得つつ、なお天皇の意のままにはならない超越的な理想性が与えられているからである。[10]

三、物語全般のヒロイン

俊蔭の娘は、「俊蔭」巻以降「内侍のかみ」巻まで、表立った姿は描かれないが、部分的にその大事な存在が指摘されている箇所もある。たとえば、「祭の使」巻で、

> 身はいたづらになるとも、取りや隠してましなど思ふにも、母北の方の御ことを思ふに、なほいとほしく思ほゆ。思ひわづらひて、隠れたる簀子に立ち入りて」（p.502）

と、琴の音色の媒介による仲忠とあて宮の一線を画すような禁忌接近時の場面に、仲忠は「母北の方（俊蔭の娘）」の嘆く姿を思い、あて宮を奪うことを思いとどまり、身を滅ぼす危機を逃れた。また、「吹上　上・下」巻では、仲忠は仲頼、行政、松方と一緒に吹上を訪問する際、

> 昔、所々に別れ琴の残り、やどもり風といひしを、かの京極といひし所に埋みたりしを、母に問ひ聞きて、夜みそかに取りに、童一人を率ていまして、取り出でさせて、それをなむ持て下りたまはむとする。（「吹上　上」p.387-388）

と、母俊蔭の娘に、残りの琴が埋めてある場所[11]を聞き出し、その幾つかの琴の中から、「やどもり風」を源涼に贈る贈物としてもっていくのである。さらに京極に埋めた残りの琴を掘り出したことによって、吹上から帰ってきた仲忠は、朱雀帝が主催する神泉苑の紅葉

---

[10] 高橋亨（1987）『物語文芸の表現史』p.180　名古屋大学出版会

[11] 俊蔭は、臨終に際して娘に以下のように遺言を残した。「この家の乾の隅の方に、深く一丈掘れる穴あり。それが上下ほとりには、沈み積みて、この弾く琴の同じさまなる琴、錦の袋に入れたる一つと、褐の袋に入れたる一つ、錦のはなん風、褐のをばはし風といふ。その琴、わがこと思さば、ゆめたふたふに人に見せたまふな。（「俊蔭」p.46）」

臺灣大學學術期刊論文

の賀で、父兼雅がいきなり、秘琴「なん風」を帝の前に差し出して、秘琴演奏を催促された時、「今は限り、この琴まさに仕うまつり静まりなむや。ねたくくちをしきに、同じくは天地おどろくばかり仕うまつらむ」（「吹上　下」p.532）と、躊躇しながら秘琴「なん風」を弾こうと決心する。源涼と二人で秘琴を競弾すると、天象自然の異変と天人が舞い降りるという奇瑞を招来したために、朱雀帝はこの功績を称え、二人に贈位加階をするほか、「涼にはあてこそ、仲忠には、そこに一の内親王」（「吹上　下」p.535）を禄とする宣旨も下した。

以上、仲忠があて宮を思う余り、奪ってしまいたいと思う瞬間、母の嘆く姿が浮上し、思いとどまる場面、秘琴「なん風」を弾いて栄進すること、この二つの背景には俊蔭の娘の陰に隠れた存在が大だったと言える。物語の展開は、それ以降、世を騒がすあて宮求婚譚は、あて宮が東宮に入内する「あて宮」巻までで終止符を打ち、物語展開での女主人公格が失われつつあるほか、代わりに「内侍のかみ」巻が際立ち、世に知られた秘琴が起こす奇瑞現象と仲忠が貴族社会で立身出世することとの相乗作用で、俊蔭の娘の華麗な登場に取って変わる。俊蔭の娘は子仲忠に朱雀帝の御前に連れられて行かれ、秘琴を弾くことになった。朱雀帝はとても感動し、俊蔭の娘を尚侍に任じた。俊蔭の娘の姿は、「内侍のかみ」巻から急に濃厚に描かれ、仲忠とともに、その活躍ぶりが延々と俊蔭秘琴一族と深く関わっていく『蔵開　上・中・下』巻へと展開していき、終巻の『楼の上　上・下』では、「単なるその人の特質としての美しさの描写ではなく、俊蔭の娘にその場にふさわしい位置を与え、また、強調し、他の女性よりも優位にたたせる描写」[12]が続いている。

「光」の美質を持っている俊蔭の娘は、秘琴の所持者、伝授者でありつつ、「あて宮」巻までは、表舞台で活躍している夫兼雅、子仲忠を隠れた場所で支えている良妻賢母型の人物としてしか描写され

[12] 鈴木幹生（2013）「清原俊蔭の娘」学習院大学平安文学研究会『うつほ物語大事典』p.177 下　勉誠出版

臺灣大學學術期刊資料庫

ていないが、実は、すぐれた才能や特質などを人に気付かれないように包み隠す韜光晦迹（とうこうかいせき）のように物語の底流に潜伏しているのである。作者は「内侍のかみ」巻を、あて宮に注目が集まる読者の目線を逸らし、俊蔭の娘の人物造型を、かぐや姫が『竹取物語』の「帝の求婚譚」、「かぐや姫の月の原郷回帰譚」の中で神聖不可侵の「天女」として描写されているように、本格的に工夫して描写していく転換点として描いていると思われる。「内侍のかみ」巻で作者が博識を発揮して複数の漢籍や古書を引用し、俊蔭の娘の一身に秘琴継承者、伝授者と尚侍の地位を成就させたのである。その物語展開の方法について、山口一樹は次のように述べている。

> 内侍のかみ巻の物語は、王昭君説話の元帝、「長恨歌」の玄宗、『竹取物語』のかぐや姫の求婚者と、先行する男性像を次々と朱雀帝に重ね合わせてゆくことで、俊蔭女に対する寵愛の重さを表現し得ている。尚侍となった俊蔭女は、帝から后として扱われ、他后にも優る手厚い待遇でもてなされている。尚侍就任前後の重層的な引用は、朱雀帝の寵愛深さを表わすことで、俊蔭女が、女官でありながら他后を超えた存在になることを必然化していた。[13]

したがって、『うつほ物語』全二十巻の「俊蔭」巻から「楼の上　下」までの長編スケールから見て、「俊蔭」巻での俊蔭の娘が「うつほ」で秘琴「なん風」を弾琴して奇瑞が起こり、兵士を退治した描写に前後照応して、「楼の上　下」での十五夜に楼の上で秘琴「なん風」を演奏して奇瑞が起こり、両院をはじめとした多くの人々に感動させた結末を関連させてみると、俊蔭一族秘琴物語は「百川海に帰す」の海のように、物語中の大小物語群や挿話を包容したメインテーマになっている。「藤原の君」巻から「あて宮」巻までのあて宮求婚物語は、『竹取物語』おけるかぐや姫をめぐる五人の貴公子の求婚難題

[13] 山口一樹（2019）「『うつほ物語』俊蔭女の尚侍就任と王昭君説話・長恨歌・竹取物語」東京大学文学部国文学研究室『東京大学国文学論集』14、p. 48上・下

臺灣大學學術資料庫

譚のように、作品半分もの紙幅が費やされても、結局主流の女主人公が不在のまま、長編物語を展開させるために用意されたサブテーマであろうと思われる。また、「国譲　上・中・下」三巻における立太子争い物語も大きなテーマの一つであるが、あくまでもあて宮求婚物語における「求婚挿話群の構成」[14]の「並列型」か、「追歩型」構成のように、全編を一貫する俊蔭秘琴物語における一大挿話にしか読み取れない。そういう意味で、俊蔭の娘は物語全般のヒロインで、あて宮は物語前半の求婚物語のヒロインだと言える。

四、「国母」格　「天人」格の地位

『うつほ物語』は大長編なので、以上のように、俊蔭の娘中心に物語全般のヒロインの人物造型を述べてきたが、あて宮の美質やあて宮求婚物語を否定しようというものではない。ただ、『うつほ物語』における理想的な女性像といえる「天女」格と「国母」格と両方の地位を具有する人物造型は、俊蔭の娘の美しさ、尚侍就任や秘琴披露での予言実現などの描写を視野に入れて考えてみれば、あて宮はその促成の一助を担う役割しか果たせなかったが、逆に俊蔭の娘のほうがかえってその天命を全うしたのである。要するに、直喩的に言えば、作者が俊蔭の娘をかぐや姫に擬えて人物を造型する構成が読み取れるのである。無論、『竹取物語』の内容の文量は『うつほ物語』とは比較にならないが、両作品の全体の構成を、女主人公の造型と対比して見極めてみれば、俊蔭の娘にかぐや姫のイメージが色濃く投影されていることが看取できる。

まず、以下の一覧の対照表で俊蔭の娘が、かぐや姫のイメージを彷彿とさせるキーポイントを示しておく。よく知られている『竹取物語』の梗概は省略し、『うつほ物語』の該当部分の巻だけを簡略に

[14] 齋藤正志（1993）「うつほ物語の奇人求婚譚ー挿話構成の基本方法」『中古文学』52 号、p.31-38
「求婚挿話群の構成は、後部段落の中に位置し、基本的には、「並列型」構成となっていることになる。それは、貴宮求婚譚の前提となる全部段落が「追歩型」構成であるのに対して、対比的に理解できることである。」（p.37 下）

臺灣大學圖書館藏日治資料庫

紹介しておく。

竹取物語	うつほ物語	うつほ物語
かぐや姫	俊蔭の娘	関連事項の巻のあらすじ
〔一〕 竹取翁の登場とかぐや姫の生い立ち 1.聖なる空間「竹の筒」 2.光り輝く美質 3.求婚拒否 4.やむを得ず五つの難題を提出 5.（月へ帰還する直前）かぐや姫、わが身の素性（「月の都の人」）を告白	「俊蔭」巻 俊蔭の登場と俊蔭の娘の生い立ち 1.聖なる空間「大木の空洞（うつほ）」 2.光り輝く美質 3.求婚拒否 4.秘琴（「なん風」）弾琴で兵士を退治 5. 天人の予言	阿修羅・天人・仙人から秘琴とその技を伝えられた俊蔭は、二十三年を経て日本へ帰国した。俊蔭は官職を辞して、娘へ秘琴と清原家の復興を託した後に亡くなった。俊蔭の娘は、太政大臣の子息（藤原兼雅）との間に子をもうけたが、不運・不遇に耐えて、北山の森の木の空洞（うつほ）で子（藤原仲忠）を育てながら秘琴の技を伝授した。仲忠が十二歳の時、母子が住む山に東国の武士が来襲し、命の危険を感じた俊蔭の娘は、秘琴「なん風」の奇瑞で難を免れた。兼雅がその琴の音を聞きつけ、奥山で二人と再会し、三条堀川の邸に引き取った。 俊蔭の娘の美しさに、兼雅は多くの妻妾の元には行かなくなってしまっ

臺灣大學學術期刊資料庫

		た。
〔二〕 かぐや姫をめぐる五人の貴公子の求婚難題譚 1.かぐや姫の不在（求婚難題） 2.かぐや姫の危機（庫持皇子の偽計） 3.中納言石上麻呂足への「少しあはれ」の同情	「藤原の君～あて宮」巻 あて宮をめぐる十六人の求婚譚 1.俊蔭の娘の不在 2.仲忠の危機（母俊蔭の娘によるあて宮求婚からの改心） 3.後、「蔵開」三巻で俊蔭の娘は、各所に散在している兼雅に冷遇される多くの妻妾たちの現状に深く同情し、全部三条邸に迎えた。	そのころ、源正頼娘のあて宮が大変な評判で求婚者が絶えなかった。皇太子、仲忠、源涼、源実忠、源仲純、上野宮、三春高基などの求婚者が次々と現れたが、続々と敗北していき、互いにライバルと認める仲忠と涼が宮中で見事な秘琴の勝負を繰りひろげたものの、結局、あて宮は皇太子に入内し、藤壺と呼ばれるようになった。
〔三〕 帝の求婚 1.帝は御輿を用意してかぐや姫を宮中へ連れて行きたい。 2.「かぐや姫、きと影」になっ	「内侍のかみ」巻～「国譲・下」巻 1.朱雀帝は俊蔭の娘を「尚侍」に任じさせ、「私の妃」、「国母」までにさせたい。 2.朱雀帝は「蛍の	「内侍のかみ」巻は、あて宮の東宮入内であて宮求婚譚がピリオドを打った後、残りの多くの求婚者をあて宮以外の女性に再分配する後始末の巻であり、要は、俊蔭系物語の主要人物である俊蔭の娘が表舞台に再登場し、朱

臺灣大學學術期刊資料庫

て、帝を拒否した。 3.帝はかぐや姫と文通することによって不即不離の関係を結んだ。	光」を借りて俊蔭の娘を見たが、宮中を退出した。 3.八月十五夜の再会を約束した。	雀帝の御前で秘琴を演奏した褒美として、「尚侍」に任じられ、「私の后」とまで称されたという、「俊蔭の秘琴一族の物語」への再展開を果たす重要な位置にある巻である。仲忠は女一宮と結婚し、その間に娘の犬宮が生まれた。仲忠は大納言へ昇進し、皇太子は新帝に、藤壺腹の皇子が春宮になった。
〔四〕 かぐや姫の月への原郷回帰 〔五〕 富士の山の煙 1.八月十五の月帰還 2.帝、二千人の軍勢を派遣し、かぐや姫を守護する。 3.天衆来迎の奇瑞 4.不老不死の薬を翁夫婦と帝に残す。	「楼の上　上・下」巻 （俊蔭一族秘琴伝承譚の終焉） 1.八月十五夜の楼上弾琴 2.嵯峨の院と朱雀院をはじめとした宮中の関係者は、ほとんど出揃って仲忠が新築した京極邸へ俊蔭の娘と孫犬宮の弾琴を聴きに集まった。 3.「りうかく風」、	仲忠は母に犬宮へ秘琴を伝えるようお願いし、いぬ宮は楼の上で琴の秘技を身につける。犬宮は二人の上皇、嵯峨の院と朱雀院を邸宅に招いて秘琴を披露し、一同に深い感動を与えるシーンで物語は終わる。

臺灣大學學術期刊資料庫

	「ほそを風」と「はし風」の弾琴による奇瑞。 4.俊蔭の娘は朱雀院に俊蔭の在唐詩集を、嵯峨の院に唐の帝から賜った高麗笛を献上した。	

一歩進んで、以上の対照表を説明してみたい。「俊蔭」巻での俊蔭とその娘の伝奇的な描写は竹取翁の登場とかぐや姫の生い立ちを想起させる。かぐや姫は光り輝く美質で求婚者が殺到して、止むを得ず五つの難題譚を提出して拒否する形を取ったことに対して、一方俊蔭の娘の場合は、父が代りに求婚者を拒んだ。両方ともそれぞれ宿命的な内容（昇天、天人の予言）を背負っている。「藤原の君」巻から「あて宮」巻までのあて宮求婚物語は『竹取物語』におけるかぐや姫をめぐる五人の貴公子の求婚譚に当たり、女主人公が不在のままで、物語が大きく展開する。「内侍のかみ」巻での朱雀帝との接近、朱雀帝の寵愛深さなどの描写内容からも分かるように、『竹取物語』での帝の相聞譚・求婚譚を想起させられるのである。特に「蛍の光り」で尚侍の姿を見た朱雀帝は、「影」から容姿に戻ったかぐや姫を見た『竹取物語』の帝と同じように、幻想の恋が終わりの時を迎えて分かれたが、以降、不即不離の関係性に変わった。前述のように、俊蔭の娘は、かぐや姫ではないが、かぐや姫と同じような「天人」格の光り輝く美質を持っている。かぐや姫は帝と一緒に宮中に入ることのできる資格を有しているが、天人の宿世のため、十五夜に月へ帰還する最後を迎える。その描写が投影されて、俊蔭の娘は、朱雀帝が自分の「后」、「国母」として迎え取ろうとしても、既に結婚して兼雅の妻になっていることを理由に、十五夜の再会を約束し

臺灣大學學術期刊資料庫

て宮中から退出する。

物語のクライマックスを迎える「楼の上　下」巻での八月十五夜の演奏会に、嵯峨の院と朱雀院をはじめとした宮中の多くの人が、ほとんど出揃って仲忠が新築した三条京極邸へ俊蔭の娘と孫犬宮の弾琴を聴きに集まった。これはあたかも「六衛の司あはせて、二千人の人を、たけとりが家につかは」(『竹』p.68) してかぐや姫を厳密に守る勢いのように、俊蔭の娘は今が幸せの絶頂のように崇められていると考えられるのである。俊蔭の娘は父の遺言を守り、演奏をためらっているが、結局、「りうかく風」を弾けば人々が「耳に入り、心に染みて面白きこと、かかることあらむや、とすぐれて聞こゆ(「楼の上　下」p.595) と感動し、「ほそを風」を弾くと、「霰しばしば降り、雲たちまちに出で来、星騒ぎ、空の気色、恐ろしげにはあらで、めづらかなる雲立ち渡る (「楼の上　下」p.596)」と奇瑞が起り、聞く人々は癒しを与えられ、みな涙を流して感動する。さらに両院に所望され、やむを得ず「天女の作り出でたまへりし琴の中の、すぐれたる一の響きにて、山中の山人のすぐれたりし手は、楽の師の、心整へて、深き遺言 (「楼の上　下」p.603)」した「はし風」も弾くことになった。「はし風」が引き起こした奇瑞について、本文引用が長くなるので省略し、テキストの頭注の説明を借りて次のように説明しておく。

> 尚侍は、はし風を手にして、父俊蔭の生前の言葉を思い出すなど、特別に俊蔭の思い出を喚起する琴であった。調べ一つをかき鳴らすと、雷が鳴り閃く、地震のように地を動かすものであった。俊蔭の怒り、恨みを表現したかのような暴力的な音である。しかし、次には、池の水が溢れ、遣水から水が流れ出す。俊蔭の恨みを浄化し、豊かな慈愛を感じさせる音となった。人々は、水が溢れ出たのを契機にしたのか、顔を涙で濡らす。人々の溢れる涙は、俊蔭の恨みが浄化されたことを示すものであろうか。(「楼の上　下」p.605)

この場面から見ると、十五夜、天衆がかぐや姫を来迎する時、

臺灣大學學術期刊資料庫

> 大空より、人、雲に乗りて下り来て、土より五尺ばかり上りたるほどに立ち連ねたり。内外なる人の心ども、物におそはるるやうにて、あひ戦はむ心もなかりけり。（中略）立てる人どもは、装束のきよらなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。（『竹』p.70-71）

と、大勢の兵士たちが守っても、天人に匹敵できないまま、人間の無力感を呈出したり、天人下りの華麗さを見せたりする奇瑞を思い出す。月で罪を犯して人間世界の竹中に誕生したかぐや姫が最後に天人の一員として月世界に迎えられたその「聖と俗」の半生を語られた『竹取物語』は、「物語の出で来はじめの親（「絵合」巻 p.380）」[15]と言われ、よく引用、借用や直喩、暗喩などのプロトタイプとして後世の物語創作に使われている。『うつほ物語』における俊蔭の娘の人物造型には、かぐや姫のイメージが深長かつ濃厚で、単なる美質の描写だけではなく、「うつほ」流離の俗なるものから、秘琴一族の「天の掟」の「国母」格が加わる聖なるものへと昇華されていく俊蔭の娘の全体像も、かぐや姫の超越性のように、ほかの女性よりも超然たる地位に登ったものだと言えよう。

五、おわりに

俊蔭の娘は、十六名にも及ぶ求婚者に取り巻かれているあて宮のような、注目された登場人物ではないが、物語の終始のけじめをつけた重要な役割を果たした女性である。あて宮は、「かたち清らに、御心らうらうじく、今めきたる御心にあり、ものの心も思し知」((「藤原の君」p.136）る女性として描かれ、多くの男性貴族に理想的な女性として求婚されるが、結局、源正頼家の政治的な判断から政略結婚の形で宮中に迎えられ、皇太子妃になり、のち皇后という「国の親」[16]になった。しかし、室城秀之氏が、「求婚譚におけるあて宮の

[15] 阿部秋生　ほか校注・訳（1995）新編　日本古典文学全集『源氏物語②（全六冊）』小学館
[16] 「藤壺の、国の親となりたまふ」（「国譲　中」p.192）

臺灣大學學術期刊資料庫

人物造型は、(中略) 何ら具体的な描写がなされず、非個性的、非意思的であるとの批判も多い」[17]と指摘しただけではなく、様々な場面で、仲忠と結婚した女一の宮が羨ましく、仲忠が中心とした秘琴一族の生活ぶりに憧れ、宮廷生活のつらさ、窮屈さと不自由に対する愚痴を漏らしており、次第に物語の表舞台から姿が消していく。これに対して、俊蔭の娘は、物語において陰の存在であるが、その天人性、美質、母子間の慈愛、藤原兼雅の最愛の妻、兼雅の妻妾を受け入れる心の寛大さ、秘琴一族の指導者や最後に得た「尚侍」の「国母」格の地位を獲得したことなどを考え合わせてみれば、実に物語を終始させた役割を果たしている理想的な女性像であり、かぐや姫の人物造型に擬えられるばかりでなく、置かれた場所でひっそり花をつけるような、隠れた場所で輝く「光」のような「天人」格を所有している物語全般のヒロインであると考えられよう。

【付記】中華民国科技部の専題研究計画「《宇津保物語》中的「人物造型」研究（『うつほ物語』における「人物造型」の研究）」（MOST 108-2410-H-030-007-MY2）補助金を受け、書き下ろしたものである。

【参考文献】

A. テキスト

中野幸一　校注・訳(1999～2002)『うつほ物語①～③（全 3 巻）』小学館

片桐洋一　ほか校注・訳（1994）新編　日本古典文学全集『竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』小学館

B. データベース

中野幸一　校注・訳(1999～2002）新編　日本古典文学全集『うつほ物語①～③（全 3 巻）』小学館

[17] 室城秀之「宇津保物語の〈あて宮〉国母への変貌」『国文学解釈と教材の研究』9 月臨時増刊号、第 27 巻 13 号、1982、p.48 下　學燈社

臺灣大學研究期刊資料庫

（知識探索サイト ジャパンナレッジ　プラス JapanKnowledge+）
http://www.jkn21.com/koten/displaymain

片桐洋一　ほか校注・訳（1994）新編　日本古典文学全集『竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』小学館
（知識探索サイト ジャパンナレッジ　プラス JapanKnowledge+）
http://www.jkn21.com/koten/displaymain

C. 専門書籍と機関誌論文（出版年代順）

須見明代（1973）「『宇津保物語』における俊蔭女」『東京女子大学日本文学』39 号

室城秀之（1982）「宇津保物語の〈あて宮〉国母への変貌」『国文学解釈と教材の研究』9 月臨時増刊号第 27 巻 13 号　學燈社

高橋亨（1987）『物語文芸の表現史』名古屋大学出版会

津島佑子（1992）「『うつほ物語』あとがき」日刈あがた・津島佑子著『堤中納言物語・うつほ物語』少年少女古典文学館 7 講談社

室伏信助（1992）「『うつほ物語』解説」日刈あがた・津島佑子著『堤中納言物語・うつほ物語』少年少女古典文学館 7 講談社

斉藤正志（1993）「うつほ物語の奇人求婚譚ー挿話構成の基本方法」『中古文学』52 号

室城秀之（1995）校注『うつほ物語　全』おうふう

猪川 優子（1999）「『うつほ物語』における俊蔭女の美―「横の繋がり」との関わりを中心に―」広島平安文学研究会『古代中世国文学』13 号

鈴木幹生（2013）「清原俊蔭の娘」学習院大学平安文学研究会『うつほ物語大事典』勉誠出版

山口一樹（2019）「『うつほ物語』俊蔭女の尚侍就任と王昭君説話・長恨歌・竹取物語」東京大学文学部国文学研究室『東京大学国文学論集』14

拙稿（2020）「『うつほ物語』における理想的な男性像―八面玲瓏な仲忠の人物造型―」『台大日本語文研究 NTU Studies in Japanese Language and Literature』第 39 期

臺灣大學學術期刊資料庫